

## 北一輝研究の動向と展望

菅原 薫 仁

### はじめに

北一輝研究はアカデミックな関心に限らず、在野の研究を含めた広いフィールドから強い関心を継続的に持たれている。『日本思想史講座4（近代）』（ベリかん社、二〇一三年）で行われた、近代日本の思想家の人気調査を行う「思想家番付」によれば、北一輝は「教科書での頻度数は低いが、思想史研究でよく取り上げられる思想家」として名を連ねており、その評価に相違なく、これまでの北一輝研究は星の数ほどあると言って問題ない状況となっている。しかし、こうした強い関心の一方で、北一輝の思想の全体像についての定説はなく、各論におけるこれまでの研究者同士の議論自体も「グイマイチ噛み合わない」という状態が続いていると言わざるを得ない。

北研究史の本格的な整理はG・M・ウィルソン『北一輝と日本の近代』（勁草書房、一九七一年）第七章に収録された「日本におけ

る北一輝研究史」がほとんど唯一といってよい。また、北一輝の研究文献目録は、一九七五年三月までの日本語文献については宮本盛太郎『北一輝研究』（有斐閣、一九七五年）にかなりの密度で網羅されている。加えて、欧語文献については前掲した『北一輝と日本の近代』に収録された「参考文献および文献補遺」に一九七一年までの研究文献目録が記されている。本稿もこれらの優れた先行研究に依るところは大きい。G・M・ウィルソンによる本格的な研究史整理が行われてから半世紀になろうとしている二〇二一年三月現在、その後の研究史を本格的に総括する作業が必要になっている。

本稿は、こうした北一輝研究の状況に対応して「議論の本位」をまず定めることを意図し、戦後まもなくから二〇二〇年現在に至るまでの膨大な北一輝研究の整理を行う。その際、北の研究史を四つの時期に大別する。第一期は昭和二〇年代（一九四五～一九五四年）、第二期は昭和三〇年代（一九五五～一九六四年）、第三期は昭和四〇年代から昭和の終わりまで（一九六五～一九八九年）、第四

期は平成の始まりから現在に至るまで（一九八九年～二〇二〇年現在まで）である。そして、それぞれの時期において論点別の分類を適宜行うことで、北一輝研究の動向を整理し、その上で今後の研究の展望を示すことを目的としている。本稿ではこの第一期から第二期（誕生と展開）を一章で、北一輝研究が最も盛んだった第三期の整理を二章で、第四期の整理と今後の研究の展望を第三章で記述する。

## 一 北一輝研究の誕生とその展開

### (1) 「日本ファシズム論」と北一輝研究

第一期は昭和二〇年代（一九四五～一九五四年）である。この時期は戦後の歴史学の出発点であると共に、最初の体系的な北一輝研究が生まれた時期でもある。第一期の北一輝像は、一言でいえば「ファシスト」である。そのため同時代の「日本ファシズム論」についてまず簡単に記述することにする。

「日本ファシズム論」の形成に多大な影響を与えたのは、具島兼三郎が提起し、丸山眞男によって広く周知された所謂「上からのファシズム／下からのファシズム」論である。具島は、血盟団事件から五・一五事件を経て二・二六事件に至る一連の過程を「下からのファシズム」と呼ぶが、それは一面でしかないとして、政府の手によって上から崩しに行われる「ファシズム」の存在を指摘し、日本の場合は「上から」が主流であり、「下からのファシズム運動」はただ政府が国内支配体制のファシショ化を図るための口実ないし促進剤として利用されたとする<sup>(2)</sup>。そして、具島は以下の

通り記述する。

かくの如く日本ではファシショ化の本流をなしてゐるものは、下からのファシズムであるよりも、むしろ上からのそれなのである。下からのファシズムが決してファシショ化の本流をなすのではないと云ふ証拠には、それが独占資本の想定したその時々ファシショ化の予定線を一步でも越えたが最後、政府の手によって苛借なく弾圧されてゐる事実を見ればこのことは極めて明瞭である。このことは五・一五事件と二・二六事件を比較してみればよく分る。五・一五事件の場合には被告達の考へてゐたことは、たゞ腐敗した政策政治の破壊だけであつて、そこには建設的な何等のプランもなかつた。そこで独占資本は自分達にとって無害なこれら被告達を遇するに「国土」を以てし国民の間に信用を失墜した政党内閣廃止の口実としてこの事件を利用した。しかし、二・二六事件になると大分越ぎが違つてゐる。被告達はターデータ後に断行すべき建設のプランをもつてゐた。そのプランは凡そ共産主義のそれとは似ても似つかぬものであつたが、それにも拘らず当時の窮迫した農民や中小商工業者、小市民等の独占資本に対する強い反感を代表してゐた。北一輝の「日本改造法案」に基礎をおく青年将校達の革新プランは、独占資本の当時想定したファシショ化の予定線を遙かに越えるものであつた。加ふるにこの事件は独占資本の代弁者達の身邊を直接脅威した点で、到底五・一五事件の比ではなかつた。そこで被告の青年将校達は「赤」と云ふ名目の下に大量銃殺された<sup>(3)</sup>。

このように、具島は五・一五事件と二・二六事件を比較し、下からのファシズム運動としての二・二六事件において、北一輝の『日本改造法案大綱』が運動の主体となった青年将校に大きな影響を与えたと主張した。続いて、丸山の「日本ファシズムの思想と運動」（一九四八年）に目を向けると、丸山はファシズム運動の時代区分

について、①準備期として、大正八、九年のちょうど世界大戦の終わった頃から満州事変に至る「民間における右翼運動の時代」を置き、②成熟期として、昭和六年の満州事変の前後から昭和一年の二・二六事件に至る「急進ファシズムの時代」を置き、③二・二六後の肅軍から終戦まで起こった「日本ファシズムの完成期」として、軍部が上からのファシズムの担い手として官僚・重臣等の半封建的勢力と独占資本及びブルジョア政党との間に連合支配体制を作り上げる所謂「八・一五までの時代」を置く。丸山が、具島の「日本ファシズム論」を受けて議論を展開しているのは明らかであるが、この①の時期について丸山は以下のように記述を行っている。

しかしもっと本来のファシズムに近い運動もやはりこの時期に発足しているのであります。例えば日本ファシズムの教祖ともいべき北一輝が大川周明・満川龜太郎とともに「猶存社」を作ったのは大正八年です。後に二・二六事件の思想的背景をなした北の「日本改造法案」はこの猶存社のいわば「わが闘争」であったわけではあります。猶存社の綱領には、「革命日本の建設」「改造運動の連絡」「亜細亜民族の解放」等が掲げられ、ここで前のグループのごとき単なる反赤化運動にとどまらず、国内改造と国際的主張とを一本に結ぶ本来のファシズム・イデオロギー

が明白に現われるようになりました。やがて間もなく大川周明と満川龜太郎は北と対立するようになって安岡正篤や西田税らと共に大正十三年、「行地社」を組織した。この「猶存社」(「行地社」の系統から後の多くの右翼団体が発生してくるわけでは

引用の通り、丸山は「日本ファシズムの教祖」としての北一輝像を主張し、「日本改造法案大綱」を「わが闘争」と同様のものとしている。加えて、丸山は北一輝の『日本改造法案大綱』の記述を取り上げて、「日本は『有機的不可分なる一大家族なり』ということをもっておりますので、その点は日本ファシズムの全部に共通しております。なるほどナチスにおいても似たような観念があります」と記述しており、ここでもナチスと北一輝の思想の共通点を取りだしている。

この「日本ファシズム論」の影響下で戦後の北一輝研究は出発することになる。最初の体系的な北一輝の伝記的研究である田中惣五郎『日本ファシズムの源流―北一輝の思想と生涯』（白楊社、一九四九年）は、北を「日本ファシズムの源流」と評価するものであり、いうまでもなくこの「日本ファシズム論」から強い影響を受けたものであった。田中の研究は、史料的な制約や、先行研究の積み重ねが無いという当時の状況を考えれば、驚くべき密度を持った研究であったといえるが、北を「ファシスト」の類型に当てはめる研究である点において思想の把握に限界がある。

この時期の他の北一輝研究は、「日本における社会ファシズムの歴史的主体は軍ではなく、二・二六事件を領導した北一輝に由来している」と評価した上で、明治維新をフランス革命と本質的に同じ

ブルジョア革命とする北の史観について労農派史論の先駆であるとも評価し、当時ファシストの代名詞であった北一輝を使うことで労農派を批判した服部之総の研究や、「純正ファシスト」・「インチキな過激主義」とした藤原弘達の研究のように、久野収の言葉を借りれば「二・二六事件の黒幕、日本型ファシズムの元兇として『死せる犬』の扱いをうけるだけ」であった。これらの評価はいずれも共産主義による革命を正統と捉える認識の下、ファシズムに疑似革命の思想を持つと判断される北一輝を否認するという構造を持っていると言える。

上記の田中の研究に代表されるように、第一期における北一輝研究は、政治学的な「ファシズム」と関連付けられているということが特徴に挙げられる。第一期の研究は、「日本ファシズム」研究と共に生まれ、そのような分析概念を前提にした北一輝の思想の類型的解釈という傾向を基本的には乗り越えられておらず、「静かな性格を持つものであった。

## (2) 北一輝研究の転換点

第二期は昭和三〇年代（一九五五―一九六四年）である。この時期の北一輝評には、花田清輝の「物凄いファウル」<sup>(12)</sup>という評や、竹内好による「その名に恥じぬ正銘のファシスト」という評、「北一輝の思想を論ずることは、すなわち日本超国家主義の真髄を究めるということに他ならない」という橋川文三の評、<sup>(13)</sup>松田道雄による土着の社会主義としての「日本社会主義」を持った社会主義者という評が挙げられる。これらは基本的に第一期のネガティブな評価から、

相対的にポジティブな評価に転じている点に特徴がある。

この変化については、一九五六年の久野収による研究の影響が大きい。久野は、伊藤博文が帝国憲法や教育勅語を通して作り上げた明治国家のシステムについて、国民には「顕教」として絶対主義天皇制による統治を行い、現実の政治の場面においては「密教」として天皇機関説に近い官僚統治を行ったとする「顕教・密教」論を提唱した。<sup>(14)</sup>久野は、北がこのシステムを逆手にとって「天皇の国民、天皇の日本」から「国民の天皇、国民の日本」へと逆転させることを図ったとし、この点において吉野作造の「民主主義」との共通性を指摘すると共に、北が革命思想の日本土着化の問題に取り組んだことを強調した。<sup>(15)</sup>この久野の研究は、北の『日本改造法案大綱』の主張が軍国主義の大きな流れを助勢したとする点については第一期の研究と同様であるものの、明治の国家主義と昭和の「ファシズム」に連続性を見出し、その「ファシズム」と区別されるものとして北の思想を位置つけた点において、これまでの「日本ファシズムの源流」といったイメージとは異なる評価を北研究史にもたらした。この意味で、久野の研究は北一輝研究の一つの転換点となったと言える。

久野のこの研究以降、北一輝の思想の再評価が進んでいく。橋川文三「昭和超国家主義の諸相」（一九六四年）は、第一期に見たような丸山眞男の極端に強い国家主義としての「超国家主義」と対比する形で、国家主義を通して国家を超えていく意味での「超国家主義」への転換を促した。<sup>(16)</sup>この時、丸山的な「超国家主義」の北は「天皇制国家」のイデオログであるが、橋川的な「超国家

主義者」としての北は「超天皇帝国家」のイデオログとなる。橋川の研究は、「超国家主義」というナショナリズムの特殊形体の内に主体的個人の形成、国民国家の閉鎖性の克服、アジアの連帯と平和の原動力を見るものであり、久野による再解釈可能性を深化させた象徴的なものである。この橋川の研究は、超国家主義のファシズム革命という思想軸から北を評価し、共産主義革命を正統と考えるものと一線を画すものとなっており、第三期の松本健一の研究へと繋がっていく意味で非常に重要な研究となっている。

一方でファシストに規定する論も依然として存在する。主要なものでは最初の体系的な伝記的研究を行った田中惣五郎が、第一期の研究から引き続き行った「北一輝・日本のファシストの象徴」（一九五九年）があるが、その影響度は第一期と比べ相対的に弱まっているといわざるを得ない。また、この時期から、竹内好の思想の影響を受けて、アジアの近代という視点が北一輝研究に追加されている。野村浩一「国民的使命感の諸類型とその特質―大隈重信・内村鑑三・北一輝」（一九六一年）は、アジアの近代との関連で思想的に大隈や内村と比較しながら分析されている点でその代表的なものである。

以上に見た通り、第二期の北一輝研究は、「ファシスト」という一面的な評価から大きく発展し、一九五九年に『北一輝著作集』の第一巻と第二巻が刊行された影響も相まって、多様化すると共に、「動的」なものへと変化したのである。

## 二 北一輝研究の興隆と「政治の季節」

### (1) 「北一輝ブーム」と「ファシズム論争」

第三期は昭和四〇年代から昭和の終わりまで（一九六五―一九八九年）である。この時期には「北一輝ブーム」と呼ばれる北研究の盛況が生まれる。この「北一輝ブーム」について『史学雑誌』の一九七三年の「回顧と展望」では、姫田光義によって以下の通りに記述されている。

ところで辛亥革命期の研究と関連して北一輝研究が最近一種のブームをなしている。今日の日本の政治・思想状況に対する左（主として「新左翼」）右の対応関係の中から生じた再評価の動きであり、それ自体は慎重に考察するべきであるが、北と中国革命とのかわりあいにおいて「支那革命外史」がとりあげられ（橋川文三『順逆の思想―脱亜以後』〈勤草書房〉、長谷川義記『よみがえる北一輝（上）』〈月刊ペン社〉など）、北の見解がそのまま宋教仁論や革命史理解に適用されるという傾向がある。久保田文次『支那革命外史』の実証的批判（『史帥』一四）はかかる無批判的無媒介的な北の見解のとり扱い方に鋭い批判を加えた中国研究者の側の唯一の論稿だが、それは単に『外史』のとり扱い方だけに止まらず北の思想と北研究ブームへの批判としてのひろがりをもつものとして注目しておきたい。<sup>(19)</sup> 姫田は、「北一輝ブーム」の下で見られる「無批判的無媒介的な北の見解のとり扱い方」に鋭い批判を加えた中国研究者として、久保田文次を取り上げ、「それは単に『外史』のとり扱い方だけに止

まらず北の思想と北研究ブームへの批判としてのひろがりをもつもの」と位置付けた。また、引用部の通り、姫田は「北一輝ブーム」を「今日の日本の政治・思想状況に対する左（主として「新左翼」）右の対応関係の中から生じた再評価の動き」と定義している。ここでは『史学雑誌』で取り上げられる程に七〇年代前半には「北一輝ブーム」は学術的にも広がっていた点を重視したい。

また、伊藤隆による「ファシズム論争」の影響は北研究史において重要である。伊藤隆は「昭和政治史研究への一視角」（一九七六年）において「大正デモクラシー」概念批判と結びつく形で、「ファシズム」概念の不明確性を問題とし、具島・丸山の延長線上に位置する「比較ファシズム論」を主張していた山口定などを相手にして「ファシズム論争」を展開した。この「ファシズム論争」に刺激され、ファシズム体制や軍部の実証研究が厚さを増したが、その反面、ファシズムという用語の使用は回避される傾向が強まることになった。「日本ファシズム論」は、具島・丸山の「上からのファシズム」／「下からのファシズム」論の誕生以降、それを批判・修正するための種々の試みであったと言えるが、伊藤の「ファシズム論争」によって「日本ファシズム論」の足元が揺らいだことで、北一輝研究もまたその研究の基礎部分から再検討の必要性が生じたことは言うまでもないことである。

## (2) 北一輝像の乱立

第三期は前述の動向の下、松本健一の発見した初期史料を所収した『北一輝著作集』第三卷（一九七二年）が刊行されたことも相ま

って、数多くの北一輝像が乱立する時期である。本章ではそれをAからFの六つに大別して整理する。まず、A「革命的ロマン主義者」という北一輝像を描く研究である。橋川文三は、第二期における研究に続いて、北をルソーのような「芸術家的・預言者的」タイプの「国家社会主義者」と規定し、そのロマンティズムを指摘した<sup>(20)</sup>。橋川はこの「国家社会主義」の概念について、かつてマルクス主義者であった者が転向して国策に便乗しようとした時に機能主義的に、つちあげた折衷理論という歴史的記憶と直接結びつけるのではなく、国家主義もしくはナショナリズムと、社会主義との交渉形態というレベルにおいて考察した<sup>(21)</sup>。そして、北一輝の場合について、ナショナリズムの要求と、国民の平均化という要求とをその思想の根本的契機としていたという意味ではこの文脈に置くことは必ずしも不当ではないとして、北の思想と高畠素之の国家社会主義との比較研究を行った<sup>(22)</sup>。

この橋川の論の流れに松本健一の研究は位置付けられる。松本は、北を浪漫主義的個人主義者から出発し、次第に権力への意志を強めてカリスマを志向した「自己絶対者」・「唯一者」と規定し、北が目指したのは浪漫的革命であったと結論した<sup>(23)</sup>。松本自身が発掘した北の初期資料にもとづくこの論文は、立論が発表した当時の思想状況に適応したこともあって注目され、北ブームの一つの頂点となったと評価されている<sup>(24)</sup>。また、北の天皇観を浪漫派の系譜に連なるものと評価した利根川裕の研究<sup>(25)</sup>や、松本の発見した初期論稿に基づき、北の詩人としての出発点を強調した木下長宏の研究はここに位置づけて問題ないものである。

次はB「土着の社会主義者」・「土着的革命家」と北を評価する研究である。一九六九年に提示された鹿野政直の研究は、「ブルジョアの価値との対決」という観点から、北を明治社会主義者中の特異な存在と位置づけている<sup>(27)</sup>。また、河原宏「超国家主義の思想形成——北一輝を中心として——」は、「土着革命の構想——北一輝が自らに課した課題、したがって彼の思想がかもし出す異様な魅力はかかってこの一点に要約されるであろう<sup>(28)</sup>」と記述した点でこの分類の代表的なものである。加えて、村上一郎の「順逆不二、一貫不惑の社会主義者<sup>(29)</sup>」という北一輝像もここに位置づけることが出来る。

三つ目はC「近代主義者」と北を評価する研究である。一九七一年、G・M・ウィルソンの「近代化推進者」という北一輝像が描かれた。G・M・ウィルソンは、「近代化論」は非常に普遍的な適用の余地のあるものであり、「近代的」要素は探しさえすればいつでも見つけられるという認識の下、「近代化論」の基準に従えば、北はあらゆる点において「近代化推進者」であることを示すことで、北を学問的に検討すると共に、箱根会議で示されたような「近代化論」の有効性を批判する<sup>(30)</sup>。また、「インテレクチュアル・ヒストリー」の方法を用いている点にも特徴があると言える。

一九七三年に滝村隆一によって描かれた「近代的な〈共同体——国家〉社会主義の雄」という北一輝像もここに分類できる。滝村は「日本の『土着的』な革命家としての北一輝像を批判し、北を近代的な思想家と評価した<sup>(31)</sup>。また、一九七五年の渡辺京二「擬ファシスト」という北一輝像もここに分類すべきである。というのも、渡辺は日本のコミュニケーション主義の系列と北を評価し、ラディカルなブル

ジョア民主主義者であるとするが、それは、日本の近代化過程において近代的民主主義者であろうとすれば、必然的に民族共同体主義者であらねばならず、その内部矛盾の故に「擬ファシスト的」傾斜すら伴わなければならないという逆説としての「北一輝問題」が存在するという前提の下での評価であるためである。加えて、一九七七年、福井直秀は北を「彼流の『各個人に支えられた社会主義』革命を構想した」と評価した。福井の研究は『国体論及び純正社会主義』に現れた合法革命論を中心に扱い、北の運動論とのギャップを描くと共に、日本を（西歐）流に描いた合法革命論の意味と限界を探り、北のクーデター方式を日本における「革命」運動論としてどう見るべきかの端緒とした点に特徴があった<sup>(33)</sup>。

四つ目はDファシストという評価をする伝統的な研究である。古屋哲夫の「北一輝論（1）〜（5）は未完であるが、その代表的なものである。一九七三年〜一九七七年にわたって行われていた古屋の研究は、体制化した日本ファシズムに対する北の特殊性とは何か、北が日本ファシズムの源流となりえた衝撃力とは何かという二つの観点から「ファシズム」との異質性を論じる当時の北研究の傾向を批判的に捉え、北思想における一般の社会主義や民主主義に対する異質性を検討し、北の思想における要素の関連の整理を行い、北の思想が、日本ファシズムの形成に参与する諸グループにどのような影響を与えたのかを系統的に研究した<sup>(34)</sup>。また、一九七五年、安部博純は「日本超国家主義の原型」でマルクス主義歴史学の視点から北を「天皇教」の呪縛から自由な「醒めた天皇主義者」と規定し、伝統的国家主義を超える新しい反動ファシズム思想の源流たりえたと

評価した。<sup>(35)</sup>

加えて、木下半治『日本右翼の研究』（現代評論社、一九七七年）は、『日本改造法案大綱』を「日本ファシスト運動の聖典」と位置づけた。そして、松沢哲成は北の提示した変革案について、革命思想の土着化などではなく単なる合法化であり、「反・現状維持で反・革命の二正面作戦」<sup>(36)</sup>であると評価し、松本清張『北一輝論』（講談社、一九七九年）は、北の政界の黒幕的な行動の面に着目し、思想的にも他人の剽窃が多く、独創的変革論は殆ど見られないとして、北を権力の走狗と断罪する点に重きを置いた。

五つ目は、Eパーソンナリティ（個人の思考と行動を特徴づける一貫した傾向）を特に重視する研究である。三島由紀夫は「北一輝をどうしても小説中の人物と考えることはできない。私が小説の人物と考えるには、ドストエフスキーと違って、一人の人物の性格がある矛盾を生みながらも統一されていなければならないのであるが、私は北一輝になお生々とした混沌を認めるからである」と記述した<sup>(37)</sup>。そして、「北一輝の憲法、その『日本改造法案大綱』は、いわば當時のはなはだ窮屈な天皇制国家の中における人間主義の叫びであったように思われるが、この人間主義の叫びは、常に血まみれていた」<sup>(38)</sup>との評を提出すると共に「北一輝が『国家改造案原理大綱』で述べたことは、新憲法でその七割方が皮肉にも実現された」と評価した<sup>(39)</sup>。上記の通り、三島は小説の人物ではない「北一輝そのもの」を志向するが、それが実証的に行われているかと言えばそれは別の問題であることは注意されたい。

歴史学的視点からは宮本盛太郎の『北一輝研究』がここに挙げら

れる。宮本は、北の思想形成を丹念に追い、北において「一貫不惑」であったものと変化したものは何であったかという自らを設定した問題に、カール・シュミットとの比較に見られるような比較思想的な方法で迫った。宮本は、北の一貫不惑意識を支えるものは、①自己の無誤謬性に対する宗教的信念と、②現状そのものを問題として極めて状況的である北の思考方法と、③『国家改造案原理大綱』以前の論稿・著書の主張が『国家改造案原理大綱』のうちに多く生かされたことの三つであるとし、北の提示する現状変革のプログラムが、状況が異なれば異なった形姿をもって現れてくると評価すると共に、その思想は客観的にはファシズムであるととした<sup>(40)</sup>。

竹山護夫の研究は、北を「分裂気質」と規定し、北の「無意識」の領域にアプローチした<sup>(41)</sup>。竹山の論からは、研究史における北一輝像の乱立状況が北自身の「分裂気質」に起因することが示唆されるものの、「無意識」は実証不可能な問題点がある。加えて、岡本幸治の研究は、進化論の受容時期をめぐって松本健一を批判すると共に、北の思想確立の時期を日露戦争開戦前であると捉え、その思想軸は生涯変わらず一貫しているものの、対外的な危機に対応して北の思想の力点が変わるとする説を提示した<sup>(42)</sup>。

最後に、F副次的なテーマとして北一輝を検討する研究である。

真っ先にイメーজされるのは二・二六事件研究であるだろう。筒井清忠「北一輝思想と二・二六事件」松沢哲成編『人と思想・北一輝』（二書房、一九七七年）は、クイーターとしての二・二六事件の解明のために、『日本改造法案大綱』に対する態度をメルクマールにして青年将校を「改造主義派」と「天皇主義派」の二類型に



分けて分析した。二つ目は法華経との関連という視点である。田村芳朗「北一輝と法華経」『ピエロタ』復刊第一号（吟遊社、一九七四年）では、北の法華経信仰に視点が当てられており、日蓮の『立正安国論』の思想と対照しつつ、近代日本における日蓮ないし法華信仰の思想史の上に北の思想を位置づけ、日蓮の仏法普遍主義・聖権主義に対して、北は国家を絶対視する国家主義、俗権主義であると規定されている。三つ目はアジア主義である。岡本幸治は『支那革命外史』におけるアジア主義の構造分析を行っている。<sup>(43)</sup>また、野村乙二郎はアジア侵略のイデオロギーとしての「大アジア主義」の一類型として北一輝を捉えた。

以上のような第三期の研究の動向は、一言でいえば多様化である。第三期では、北から離れないことを志向し、出来る限り北に即した読解を行うという姿勢の確立を見て取れるが、一方では、それを建前として「政治の季節」の下で各論者が自らの立場について北を通して語るといふ「場」が生まれてもいる点に特徴がある。この北一輝の思想自体に目を向けるという基本的姿勢の確立自体は評価すべきことであるが、その反面、第三期の研究には研究者各々の関心に引張られる形で北一輝像が乱立しているという問題点がある。第三期は、第二期における戦後歴史学の批判的検討の流れを引き継ぐ形で各研究者が様々な方法を用いて北一輝像の再解釈を重ねたが、「政治の季節」の終わりと共に前述の特殊な「場」は徐々に終息していった。その時に、これらの一種の「プラグマティック」な研究のうち、どれほどの研究が「時間」に耐えうる「強度」を持っているのだろうか。そのほとんどが、北一輝研究者以外には全く顧みら

れないものになっていることは非常に残酷なことである。

### 三 北一輝研究の現在とその課題

#### (1) 近年の研究動向

第四期は平成の始まりから現在に至るまで（一九八九年～二〇二〇年）である。第四期においては、第三期的な「政治の季節」の影響下で生まれ、そして生き残ってきた北一輝像の「流れ」と、「政治の季節」以後の北一輝像の新たな「流れ」が今も並立している状況である。とはいえ、第四期は、第三期のAとDのような「北一輝は何者だったのか」という規定に重点を置く研究は少なく、また、F副次的なテーマとして北一輝を検討する研究の内、特に二・二六事件との関わりについては下火になっていると言わざるを得ない。筒井清忠、須崎慎一らの二・二六事件研究の進展により、北一輝の思想も青年将校運動という議論が浸透してきた現在、政治史における北一輝の重要性が相対的に低下し、結果的に北一輝像は思想史と政治史に分裂している状況になっている。

一方で、その分裂によって皮肉にも北自身の思想そのものへの関心がより強まり、Eパーソナリティ（個人の思考と行動を特徴づける一貫した傾向）を特に重視する研究は盛んに行われている。また、こうした関心に引張られる形で北のアジア主義や革命観、北の信仰についてのテーマ研究（Fに分類される）は深められているとい

ってよい。具体的には、思想形成に焦点を当て、北の思想構造が確立した時期を探り、対外的な危機に際して北の思想の力点が変わるとした岡

本幸治『北一輝…転換期の思想構造』(ミネルヴァ書房、一九九六年)、様々に解釈可能な北の政治思想のうち、北が本当に意図したものを重視し、主として穂積八束との比較から北の「国体論」を探った藤本眞悟の研究(一九九八年)、松本健一による全五巻にわたる評伝の刊行(二〇〇四年)、北の国家論を思想的に読み解く嘉戸一将『北一輝…国家と進化』(講談社、二〇〇九年)、北の「経済」思想にアプローチした清水元『北一輝…もう一つの「明治国家」を求めて』(日本経済評論社、二〇一二年)、二・二六事件の北一輝ということをはひとまずカッコにいて北の思想そのものを詳細に検討することを志向し、『国体論及び純正社会主義』が、終生、北を拘束し続けていたとすることで、北における主要著作の重みを再解釈した古賀運の研究(二〇一四年)、孫文と北一輝の「革命」構想の比較・分析を通して近代における「革命」について考察した八ヶ代美佳『孫文と北一輝—「革命」とは何か』(敬文舎、二〇一七年)がこの時期の重要な研究として挙げられる。

また、『北一輝著作集』に含まれていない新史料として『自筆修正版 国体論及び純正社会主義』<sup>(46)</sup>が刊行された影響は大きい。萩原稔の『北一輝の「革命」と「アジア」』<sup>(49)</sup>(二〇一一年)は、北の対外認識に焦点を当て、北一輝の「革命」思想の一貫性を強調した点において卓抜した研究であると共に、自筆修正版『国体論及び純正社会主義』の検討による成果を従来の評伝的研究に落とし込んだ点において最も優れた研究の一つである。また、C・W・A・スピルマンの『近代日本の革新論とアジア主義』(二〇一五年)は、猶存社研究の文脈で北一輝を扱い、北が、一九〇六年の『国体論及び純正

社会主義』、第一次世界大戦中の『支那革命外史』、一九一九年の『国家改造案原理大綱』以降はパンフレットや書簡を除いて著作活動をやめていた点に着目し、一九二〇年代から三〇年代にかけて北が書いたとされている文書は様々な活動家の注文に応じて書かれており、どこまで北の個人的な考えをあらわすのかには疑問の余地があるとすると、『国体論及び純正社会主義』の自筆修正版の修正・訂正された部分を分析することで北の思想が晩年どのように変化したかを探り、北の思想の一貫性に再検討を加えている。<sup>(50)</sup>

## (2) 今後の展望

これまで、北一輝研究史を概観してきたが、半世紀以上にわたる研究動向を整理した上で今後の展望を述べれば、①「思想の一貫性」の問題(主として『国体論及び純正社会主義』をどう読むか)、②北の国体論・「純正社会主義」の位置づけ、③北の信仰と思想との関わりという三点が大きな論点になると思われる。これらはそれぞれが完全に独立して存在するわけではなく、それぞれ「グラデーション」のように重なり合っている問題である。

まず、①「思想の一貫性」の問題である。北自身は自らの思想について「理論として二十三歳の青年の主張論弁したことも、実行者として隣国に多少の足跡を印したことも、而して此の改造法案に表はれたことも、二十年間嘗て大本根柢の義に於て一点一画の訂正なしと云ふ根本事の諒解を欲する」と主張しているが、現在までの研究は北の主著の間に「転向」・「変節」があったとする立場と、思想に一貫性があるとする立場に二分している。この問題は、「思想に

連続性があるか、どこかで断絶があるか」という問いに言い換えることができる。この問い自体は研究の黎明期から存在しており、前述した丸山の研究は、明治期に構築された「天皇制国家原理」と昭和期の「超国家主義」に連続性を主張し、その最も象徴的な人物の一人として北を「日本ファシズムの教祖」と位置付けている。それに対して、久野は伝統的国家主義と「超国家主義」の思想的切れ目がはっきりしていない（だが、切れている）とし、その「超国家主義」の代表的な人物として北を挙げている。

「転向」・「変節」を主張する立場の研究は、例えば、古屋哲夫の「北一輝論」や、近年のものでは八ヶ代美佳の研究が挙げられるが、これらはいずれも久野のラインに乗る研究であると位置づけることができる。この「転向」・「変節」を主張する研究は、「日本ファシズム」あるいは「超国家主義」的な性格を有しているか、それとも「戦後民主主義」的かという二項対立に軸が置かれており、処女作である『国体論及び純正社会主義』を後者の「戦後民主主義」的な性格を持つものと捉えるのに対して、後期の『支那革命外史』及び『国家改造案原理大綱』・『日本改造法案大綱』を前者の性格を持つものと捉える。その論の構成上、ある意味で必然的に「変節」・「転向」を導く構造になっているという問題が研究の根幹に存在していると言わざるを得ない。

対して、「思想の一貫性」を主張する立場の研究は、「ファシスト」と規定する具島・丸山以来の研究自体には否定的なものが多い一方で、明治期の思想から昭和期の思想に連続性を見る点においてある意味で丸山のラインに接近する研究であるといえる。宮本盛太

郎『北一輝研究』、松本健一『評伝北一輝』全五巻、萩原稔『北一輝の「革命」と「アジア」』は前期の北の思想と後期の北の思想との連続性を強調する代表的なものである。

「思想の一貫性」の問題を検討する上で争点になるのはなんといっても『国体論および純正社会主義』をどう読むかになる。その意味で、②北の国体論・「純正社会主義」の位置づけが重要になる。北一輝の評価が現在においても定まっていない原因は、処女作『国体論及び純正社会主義』の正確な思想構造の把握が出来ていないことにある。『国体論及び純正社会主義』は北の思想家としての出発点であり、北研究においてその理論の正確な把握は避けて通ることの出来ないものであるが、そのテキスト自体が持つ難解さや膨大さが要因となり、北の「意図したもの」というテキストの一面が抜け落ち、結果的に北から外れた恣意的な読解を促してしまう傾向がある。

そのため、根本的かつ徹底的に北の思想に迫るという意識の下、「北一輝本人の意図」から離れずに、虚心坦懐にテキストを読み込むことが北一輝研究では特に必要になる。その時、最も重要な先行研究は、北の「純正社会主義」の思想構造をテキストから丹念に明らかにし、図式化を行った岡本幸治の研究である。後の研究者が岡本の研究を補強するにしろ、岡本が研究史の上で果たした歴史的役割の重要性は疑うべくもないだろう。加えて、自筆修正版『国体論及び純正社会主義』が刊行されたことは、比較のための基礎として『国体論及び純正社会主義』を読解する価値を相対的に高めていると言える。

また、現在の北研究の主流の一つとなっているのは、主として国際関係論の関心から行われている北のアジア主義・対外観・革命観に視点をあてる研究である。これらは「第一次教科書問題」後に先鋭化し、「グローバル・ヒストリー」の強い影響下で唱えられる「一国史に留まらない歴史叙述」への貢献を目指すものであると言えるが、では「一国史に留まらない歴史叙述」は果たして「史観」から自由なものであるだろうか。その問題を象徴するように、北のアジア主義・対外観・革命観に焦点を当てる研究は、それらの観念が北の国体論という極めて「日本的な議論」と密接に関わって導かれるものであることに触れず、その形成過程について全く詳細に検討していないという問題を抱えている。

とはいえ、国体論に視点を当てる北の先行研究には不足が残っている状況である。北の国体論を探った藤本眞悟の研究は、穂積八束との比較に視点を置き、国体論を考察するという論の性質上、他の様々な知識人の批判から自身の国体論と「純正社会主義」を形成する同時代の北一輝の在り方が抜け落ちる点に問題がある。また、古賀運は国体論に視点を当て美濃部との比較を志向した点で重要だが、古賀の結論は「北の国家論の主要な枠組みが美濃部によって与えられたのではないかと推量する」ことに留まっており、実証的に思想の受容が示されたとは言いがたい点に問題が残っている。

次に、③北の信仰と思想との関わりである。北の信仰に関しての専論は主に「日蓮主義」の文脈で進められてきており、近年のものは北を「日蓮主義第二世代」と捉える大谷栄一<sup>(53)</sup>や、北一輝に焦点を当てて一九三〇年代の日蓮主義の急進化を描いた津城寛文の研究

<sup>(54)</sup>がある。一方で、若林孝彦は従来の研究状況に対して、北の法華思想と政治思想の関係については曖昧にされるのが常である点を問題視し、北の思想に『法華経』や日蓮の思想がどのような影響を与えたか、あるいは与えなかったかという問いを設定して分析を行い、北の『法華経』への傾倒が国柱会などの既存の日蓮系の組織とは隔絶されたところでなされている点を強調し、北は「日蓮主義者」ではなく、従来の北一輝研究においては「日蓮主義」・『法華経』が強調されすぎていると結論した。<sup>(55)</sup>

この両者の立場のどちらにせよ、『国体論及び純正社会主義』を筆頭にした北の著作の記述を抜き出して部分的な比較を行うに留まっている。その原因として北一輝研究の混迷した状況があることは言うまでもないが、北の思想構造と日蓮主義の思想構造の比較という少しマクロなレベルでの比較を行わなければ、影響を肯定するにしろ否定するにしろ、全体像の分析を欠いた片手落ちの分析になると言わざるを得ない。特に、影響を否定的に見る立場を取る時、両者の思想を示す記述自体に部分的な違いがあったとしても、思想上に信仰上の問題に限らず、政治・経済等の社会的な領域へ拡張しようとするという思想構造において両者が共通する可能性が残る問題がある。その場合、若林が指摘するように、直接に北を「日蓮主義者」の代表と規定することについては確かに疑問が残るにしろ、『日蓮主義』と北の思想を比較する有用性が依然として存在することになり、その時、若林の「日蓮主義」・『法華経』の強調の否定という総論の意義は薄れることになる。

また、そもそも信仰についての研究史においては『法華経』Ⅱ日

蓮の思想／「日蓮主義」と前提して考察しているが、北が日蓮というフィルターを通して『法華経』を見たのではなく、単純に『法華経』の重視視「日蓮主義」であった場合、これまでの「日蓮主義」との比較研究は基礎的な部分から崩れる可能性があるのではないか。その意味で、一九一七～一九一八年頃に北に『法華経』の読経法を伝えたと言われる「永福という行者」の来歴は重要になるが、現在史料が乏しい状況であることは一筆する必要があるだろう。これら三点の論点の提出をもって今後の展望を終えることにする。

### おわりに

北一輝の研究は結局のところ「北一輝」そのものと向き合う事から始めなければならない。個人の歴史、特に個人の思想史の叙述は、それを書く主体としての歴史家の歴史認識と密接に結びついて行われるが、これまでの北一輝研究には、個人の思想史に取り組み際に特に強く現れる、歴史叙述と歴史認識の問題が象徴的に現れている。それらの研究史を史料として俎上に載せ、「歴史化」を行うことで、北一輝研究と実証的な歴史学双方の問い直しの契機を作れるのではないか。そう考えて本稿を執筆したが、一方で既知を重ねただけになっていないかという心配もある。とはいえ、これまでの先行研究整理で本格的には取り組まれていなかった一九七〇年代以降の北一輝研究の動向を整理し、今後の研究の展望を示した点には、これからの北一輝研究において少なからぬ意義があるだろう。

一方で、本稿は論の性格上、研究を羅列的に記述するところがあり、北一輝研究を行ってきた個人についての詳細な思想的検討や、

当時の時代状況の記述が詳細に行えていない問題がある。北一輝研究と実証的な歴史学双方の問い直しの契機を作るという大きな目標の達成のために、上記の作業は不可欠であるが、それらは今後の課題として本稿を閉じようと思う。

### 註

- (1) 苅部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編集『日本思想史講座 近代』(へりかん社、二〇一三年)一五頁。
- (2) 具島兼三郎「侵略戦争の主体・日本ファシズムの特質」『言論』創刊号(一九四六年一月)二三～二四頁。
- (3) 同右、二四～二五頁。
- (4) 丸山眞男「日本ファシズムの思想と運動」『東洋文化講座』第二卷(白鳥書院、一九四八年)に初出。本稿で使用したのは『丸山眞男集第三卷』(岩波書店、一九九五年)一六二～一六三頁。
- (5) 同右、二六四～二六五頁。
- (6) 同右、二七四頁。
- (7) 服部之総「東条政権の歴史の後景」(白揚社、一九四九年)一三〇頁。
- (8) 藤原弘達「擬似」革命者の役割「思想」三五五号(一九五四年一月)五八頁。
- (9) 同右、七五頁。
- (10) 久野収「超国家主義の原型―北一輝の場合―」『近代日本思想史講座』(筑摩書房、一九五九年)二六頁。
- (11) 花田清輝「北一輝」『中央公論』七〇号(一九五五年一月)四四三頁。
- (12) 竹内好「北一輝」『現代倫理』六(筑摩書房、一九五八年)三二五頁。北の理論創造の能力を評価する文脈でこの言葉は使われている。
- (13) 橋川文三「昭和超国家主義の諸相」『現代日本思想大系三』超国家主義

- 義」(筑摩書房、一九六四年)三四頁。
- (14) 松田道雄「日本およびロシアの初期社会主義—ゲルツェンと北一輝—  
桑原武夫編『ブルジョワ革命の比較研究』(筑摩書房、一九六四年)四三〇頁。
- (15) 久野収「日本の超国家主義—昭和維新の思想」、久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』(岩波新書、一九五六年)一二六～一二七頁。
- (16) 同右、一三八～一四〇頁。
- (17) 別所良美「超国家主義と国民国家の超越—北一輝の『純正社会主義』の再評価に向けて—」『昭和国际』新論(文理閣、二〇〇九年)二二五～二二六頁。
- (18) 同右、二二六頁。
- (19) 「一九七三年の歴史学会—回顧と展望—」『史学雑誌』第八三編第五号(一九七四年五月)東アジア(中国—近代)一九六頁。
- (20) 橋川文三「国家社会主義の発想様式」『年報・政治学一九六八』一九卷(一九六八年九月)に初出。引用は松沢哲成『北一輝人と思想』(三一書房、一九七七年)一〇三頁。
- (21) 同右、八五～八六頁。
- (22) 同右、八六～八七頁。
- (23) 松本健一「唯一者とその浪漫的革命」『辺境』六号(一九七一年十月)に初出。本稿で使用したのは、五十嵐暁郎『北一輝』論集(三一書房、一九七九年)一三〇～一三二頁より。
- (24) 前掲、『北一輝』論集—一三〇頁。
- (25) 利根川裕「北一輝における天皇」『浪漫』(一九七四年四月・五月・六月号)に初出。本稿では前掲『北一輝論集』二七一～二九五頁のものを参照した。
- (26) 木下長宏「詩人輝次郎の転位」『ヒエロタ』復刊第一号(吟遊社、一九七四年)。
- (27) 鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』(筑摩書房、一九六九年)五九四～五九八頁。
- (28) 河原宏「超国家主義の思想形成—北一輝を中心として—」『日本のファシズム・形成期の研究』(早稲田大学出版部、一九七〇年)四～五頁。
- (29) 村上一郎「北一輝論」(三一書房、一九七〇年)一一頁。
- (30) G・M・ウィルソン「日本語版への序文」『北一輝と日本の近代』(勁草書房、一九七一年) v 頁。
- (31) 滝村隆一「北一輝—日本の国家社会主義」(勁草書房、一九七三年)四〇頁。
- (32) 渡辺京二「北一輝問題」『小さきものの死』(葦書房、一九七五年)一五一～一五二頁。
- (33) 福井直秀「初期北一輝の変革論」松沢哲成編『北一輝人と思想』(三一書房、一九七七年)一五七～一五八頁。
- (34) 古屋哲夫「北一輝論(一)」『人文学報』三六号(一九七三年三月)一一三～一二五頁。
- (35) 安部博純『日本ファシズム史研究序説』(未来社、一九七五年)三四六～三四七頁。
- (36) 松沢哲成『アジア主義とファシズム』(れんが書房新社、一九七九年)二二六頁。
- (37) 三島由紀夫「北一輝論『日本改造法案大綱』を中心にして」『三田文学』五六号(一九六九年七月)五八頁。
- (38) 同右、五八頁。
- (39) 同右、五六頁。
- (40) 宮本盛太郎「北一輝研究」(有斐閣、一九七五年)二二六頁。
- (41) 竹山護夫「北一輝の生存空間の転換—その『霊的生活』への至り着きの意味」『北一輝の人間像』(有斐閣、一九七六年)九五～一〇九頁。
- (42) 岡本の研究としては「日露戦争と北一輝の思想形成—『北学』形成における決定的意義について」『社会科学論集』第八・九合併号(一九七七年二月)や「北一輝における進化論の受容と変容(上)」『大阪府立大

- 学紀要（人文・社会科学）第二八巻（一九八〇年三月）や、「北一輝における進化論の受容と変容（下）」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）第二九巻（一九八一年三月）』がある。
- (43) 岡本幸治「北一輝のアジア主義・支那革命外史」の構造分析『愛媛法学会雑誌』九巻一号（一九八二年八月）。
- (44) 野村乙三朗「大アジア主義の一類型：北一輝の対英・米認識を中心として」『日本外交の思想』七一号（一九八二年八月）。
- (45) 藤本眞悟の研究としては「北一輝の政治思想（Ⅰ）——国体論の一考察」『政治経済史学』三八五号（一九九八年九月）や、「北一輝の政治思想（Ⅱ）——国体論の一考察」『政治経済史学』三八六号（一九九八年一〇月）が挙げられる。
- (46) 松本健一『評伝北一輝』全五巻（岩波書店、二〇〇四年）。
- (47) 古賀運『北一輝：革命思想として読む』（御茶の水書房、二〇一四年）。
- (48) 長谷川雄一、C・W・A・スピルマン、萩原稔編『北一輝 自筆修正 国体論及び純正社会主義』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）。
- (49) 萩原稔『北一輝の「革命」と「アジア」』（ミネルヴァ書房、二〇一一年）。
- (50) C・W・A・スピルマン『近代日本の革新論とアジア主義：北一輝、大川周明、満川龜太郎らの思想と行動』（岩波書店、二〇一五年）。
- (51) 北一輝「第三回の公刊頒布に際して告ぐ」『北一輝著作集』第二巻（みすず書房、一九五九年）三六〇頁。
- (52) 前掲、『北一輝：革命思想として読む』一六九頁。
- (53) 大谷栄一『近代仏教という視座』（ベリかん社、二〇一二年）二二三五頁。
- (54) 津城寛文「国家改造と急進日蓮主義——北一輝を焦点に」西山茂編『シリーズ日蓮 四 近現代の法華運動と在家教団』（春秋社、二〇一四年）二二～二二九頁。
- (55) 若林孝彦「北一輝と法華思想（一）」『佛教経済研究』四六号（二〇一七年五月）一八一～一八二頁。
- (56) 若林孝彦「北一輝と法華思想（二）」『佛教経済研究』四八号（二〇一九年五月）二一九～二二二頁。近代日蓮主義運動と北の異質な側面を強調した他の研究は、金子宗徳「国家改造運動と日蓮——北一輝を中心に——」『国体文化』一〇三号（二〇〇九年七月）が挙げられる。